

ライフ
ストーリー

ノエルさん
(2021年3月社会学部卒業)

トランスジェンダーとして生きるということ

1. 自己紹介

私は社会学部卒業生で、上ヶ原キャンパスで4年間学んでいました。出身は福岡県で高校生までは北九州で過ごしていました。現在は通信会社に勤務しており、熊本県に在住しています。

セクシュアリティは MTF トランスジェンダーでヘテロセクシュアルです。専門用語ばかり並べても難しいのでわかりやすく説明すると、生まれたときの性別は男性で今は女性として生活をしており、恋愛対象は男性ということになります。性別適合手術(男性器を女性器に変える手術)はまだ行っていませんが、2020年に睾丸摘出手術を受けており、女性ホルモン注射を月に一回接種しています。女性ホルモンを接種し始めたのは高校生からなのですが、その時は女性ホルモンの錠剤を服用していました。女性ホルモンを接種していくと身体的に男性らしさがなくなっていき女性化していきます。体つきもかなりふくよかになりましたし髪も細く柔らかくなります。そのため大学入学のころにはかなり女性っぽくなったので関学に入学するのと同時に女性としての生活を始めることになりました。

後述しますが、現在は会社でも女性として生活しており、同僚も私が(戸籍上)男性であることを知らないです。女性として生活し始めて6年目になるので自分でも男性だったことを忘れてしまう、なんてことも多々あります(笑)。ですので、このライフストーリー執筆が自分のアイデンティティを振り返る非常に良い契機になっています。文章を書くことがあまり得意ではないのでわかりにくい箇所もあると思いますが、温かい目で読んで頂けると幸いです。

2. はじめてカミングアウトしたとき

私のはじめてカミングアウトをしたのは中学3年生のときだったと思います。このころの私は自分がトランスジェンダーだという自覚はなく、ただ女の子と一緒にいる方が楽しくて、好きなものもかわいいものが多く、中性的な男の子だったと思います。ただ小さいころからよく「女の子っぽい、なよなよした男の子」といわれることが多く、周囲からも「おかま」と言われてしまうことも少しですがありました。今だったら「ニューハーフ」や「おかま」

というカテゴリーではなく「トランスジェンダー」なんだと思うことができますが、当時は女っぽい男はすべて「ニューハーフ」や「おかま」として認識されてしまうことが多かったです。自分は可愛いものが好きだし、女の子と過ごすことの方が楽しいけど別にニューハーフになりたいわけではないと思っていたので、非常に複雑な気持ちでいました。ニューハーフばかりを笑いのネタとして取り扱うテレビなどのメディアの影響がかなり大きかったのだろうと思います。

そんな私が「トランスジェンダー」という言葉を知ったのが中学 3 年生くらいだったと思います。当時はスマホを持っていなかったなので、学校にあるパソコンからインターネットを使って知ったのかもしれませんが（記憶が曖昧でたしかではないですが…）。ニューハーフではなく、「普通の」女性として生活している元男性の方がこんなにいるんだと驚いたのを覚えています。「トランスジェンダー」という言葉を知ってからは、自分のアイデンティティを獲得したように思います。ただ、どのように女性になればいいのか未来が全くわからなかったのもやもやした気持ちを抱えていました。

中学 3 年生ときに、一番仲良くしてもらっていた女友達 2 人のうちの 1 人から告白を受けました。その子にとってはいつも一緒にいる男子のことを、だんだん友達としてだけでなく恋愛感情を抱えていったという自然な流れだったのかもしれませんが。しかし、私にとっては女友達を異性（恋愛対象）としてみることができず、告白を受けたときは戸惑いが大きかったです。告白を断るしかないけど、ただ「好きにはなれない」と説明してしまっただけで恋愛対象としてはみているけど、好きにはなれないと言っているようで違うなと感じていました。そこで「自分が女性を恋愛対象として見ることができない」、「自分自身も女性として生きていきたい（かもしれないくらいの気持ち）」と正直に伝えることにしました。すると、仲良くしてくれていた 2 人の女友達双方とも理解してくれて、むしろ女性になることを応援してくれました。これが私の人生初のカミングアウトになりました。このときの友達とは今でも連絡を取り合うほどの親友になることができます。

3. 私なりのカミングアウト法

カミングアウトって決して一方的ではだめだと思います。カミングアウトされる側の気持ちも汲む必要があります。そのため、どうしてこの人にカミングアウトをする必要があるのかを事前に入念に考えることが重要です。たとえば家族や親戚にだったら今まで育ててきてくれた感謝の気持ちが一番だし、相手からすると「男の子」として育ててきたはずの子が急に実は「女の子」になりたいといい始めたら、よい悪いはさておき、びっくりさせてしまうことに変わりはありません。自分が苦しいからといって家族の反応を自分の思い通りにすることはできないので、まずはしっかりと時間をとって自分の気持ちや考えを伝える。そして「相手はどう思っているのか」、「時間が必要なのかそれとも全く受け入れられないのか」、「受け入れられなかったとしてもそれは相手の決めることなので私が強制してはいけません」と思っています。ただこちらは「あなたと良好な関係を続けたいと思っています。そのためにゆっくりと近づいていきたい」という思いを真剣に伝えます。私の家族へのカミングアウトの時はそのように行いました。いまでは昔とかわらずすごく良好な関係性を構築することができています。

そのほかにカミングアウトの必要があるのは友人や会社の人ですかね。友人と会社ではまったくカミングアウトの気持ちが違います。それは無理にする必要があるかないかの違いだと思います。会社であれば雇用関係にかかわりますし、性別適合手術をうけるのならば有給をとる必要が出てくるので事前に人事に伝えるべきだと思います。対して、友人の場合であれば、無理に行う必要はないと思っています。私の場合では、「あなたが女だから、男だからという理由で友達になったわけではない」と言ってくれる友人がいました。カミングアウトしても離れないでそばにいてくれると思えた時にすればいいと思っています。

ちなみにカミングアウトは最初の人が一番緊張します。2人目以降は別にカミングアウト失敗しても1人目の子がいるから、みたいなある種の自信がついていくので最近はそのほどカミングアウトに抵抗を感じません。むしろカミングアウトする必要性も感じなくなったので、私が女性だと思って仲良くしている子もいます。温泉入る時くらいしか身体の性別ってそれ

ほど気になりませんよね。あとは恋愛の時ですね。

セクシュアルマイノリティの中でトランスジェンダーのカミングアウトは、ゲイやレズビアン、バイセクシュアルと違うところがあります。それは相手が異性愛者であることが多いことです。もちろんゲイやレズビアン、バイセクシュアルの方もノンケ(いわゆる一般人)を好きになってしまって難しい恋愛を抱えることもあります。彼らは同性同士で恋愛感情を抱くことができますよね。例えばゲイ同士だったらお互いがセクシュアルマイノリティであるみたいな。私の場合だと私はトランスジェンダーですけど好きになる相手はノンケ男性(いわゆる一般男性)なので、相手はセクマイじゃないです。最近は女性として生活しているので男性から女性だと思って好意を寄せられたとしても、いつかはカミングアウトをしなくてははいけません。ゲイとレズビアンは好意を寄せている時点でお互い同性愛であることがわかるから、お互いセクマイの生きづらさを共感できていて羨ましいなど感じることは多々ありますね。

4. カミングアウトをしてうれしかった反応と悲しかった反応

上述していますが、友人にカミングアウトしたときに「性別じゃなくノエルの性格とか人柄が好きで一緒にいるんよ」と言われたときはめちゃくちゃ嬉しかったですね。あと、これは受け取り方によって変わってくるんですけど、私個人の気持ちでは「だから何？」くらいの反応が嬉しいですね。これは「そんな性別とか関係ないでしょ」、「問題じゃないわ」くらいの意味合いで「だからどうしたの？」という反応だと嬉しいです。もちろんそのあとには「今までと変わらないよ」という言葉がついてきてほしいですけど。

対してつらかった反応は恋愛の時ですね。過去に自分の身体の事を話していなくて、女性として見られていた人と良い感じになったことがあります。ただ、どうしても相手から身体の関係性を求められてしまいそうになったときにカミングアウトをせざるを得なくて。「気持ち悪い」とかそういう言葉は一切かけられなかったですが、「自分にはこれ以上は難しい」と言われてしまいました。「きっとノエルの事受け入れてくれる人がいるよ」と励ましてくれましたが、私にとってはかなりつらかった体験の一つです。

こういう比較はあまり好ましくないことは十分わかっていますが、あえて書かせてください(不快に思われる方がいらっしゃったら申し訳ございません)。例えば体にコンプレックスを抱えている人(顔や体型、不妊の方など)ってたくさんいると思うんです。ただ彼らがお付き合いをするときに相手に絶対にカミングアウトするかといわれたらそれは絶対じゃないと思います。不妊の女性がいて、でも好意を寄せられた男性がいた場合、女性であることには変わりはありません。子供が絶対に欲しいという男性からしたらお付き合いできないのかもしれませんが、付き合う前になぜいわなかったのかと問いただされるケースは稀なように思います。でも私のようなトランスジェンダーの場合、隠して交際を始めたとしてもいつかは必ず話さなくてははいけません。それも女性だとおもって付き合っていた男性からしたらどこか騙されたような、後出ししたような感じが否めなくて。女性としてあまり不自由なく生活し始めた私にとって最近の最大の難問が恋愛だなと感じています。

5. どうして関学を選んだのか

私が関西学院大学への入学を決めたのは CASSIS(関学の LGBT サークル)やレインボーウィークの存在が大きいです。大学生からは女性として生活がしたかったので、入学する前に大学へ問い合わせたことがあります。その時は某国立大学と関学のどちらの入学を決めるか最終的に決めかねている状況でした。大学入学後の学生証の名前の変更やトイレの問題などを双方に問い合わせたところ、某国立大学では「前例がないため今ここでは申し上げられませんので確認します」とあまり好意的な受け答えはしていただけませんでした。対して関学では、人権教育研究室の武田先生がすぐに相談に乗ってくれ、CASSIS のトランスジェンダーの先輩につなげてくれました。学生証は自分の通称名で発行してもらえるしトイレは多目的トイレがあり、健康診断は一般生徒とは別にもらえることなど詳しく教えて頂きました。そのほかにも社会学部にはジェンダー論やセクシュアリティ論などほかの大学では珍しい学問を学ぶことができることもあり、関学への入学を決意しました。入学してみて事前に

知らされていた通り、全く不快な思いを抱くことなくむしろありがたいことばかりでした。卒業した今ではあれほど恵まれた環境はなかなかないなど感謝しています。

6. マイノリティ性を感じたとき

最近専ら女性として生活して慣れてきたので、あまりマイノリティだと感じることはありません。ただ、やっぱり同級生が結婚や出産をしてライフステージを進めていく姿をみていると感じることがあります。トランスジェンダーの場合、性別適合手術をうけて法的に性別を変えることはできるので、移行した後は男性と結婚をすることは可能です。ただもし戸籍上の性別が女性になったとしても、子供は産めませんし、男性であった過去は一生消えません。養子を引き取ったとしてもその子にいつかは自分の過去を伝える必要があるなど私は思います。世間の「普通」って、それを享受している人は意外と少ないのかもしれないですね。結婚をして子供を授かって、その子供が巣立って、孫ができて、年を取って家族に見守られながら息を引き取っていくことが世間の「幸せ」だと思いますし、私も望んでいます。ただそれらを「普通」としてみなすように求めていったのは誰だったのでしょうか？だれが結婚して家族をつくり子供を授かるべきだと決めたのでしょうか？私は社会学部卒業なので、このような問いをもつことを学んできました。実は国民のあるべき姿を定義してそれを促してきたのは社会だったと感じています。戦時中から高度経済成長期までに日本の国力を確保する必要があった社会は、今でいう「普通」を求めてきたと思います。その時代からもう数十年がたっている現代では、多様な生き方や個人を尊重する社会に変わりつつあります。セクシュアルマイノリティもその流れにのって、受け入れてくれる社会に変わってきていると思います。一昔前までは性別を変えるなんて頭のおかしいやつだと非難されていました。ずいぶん生きやすい世の中になってはいますが、私たちの中に無意識に埋め込まれた「普通」の幸せはまだまだ存在していると思います。

7. 初めて LGBTQ+の当事者に出会ったときについて

私がテレビなどのメディアではなく、対面で当事者の方にお会いしたのは CASSIS のメンバーが初めてです。おそらくレインボーウィークの会議で先輩と一緒に出席したときにお会いしたと思います。その先輩とは入学前にトランスジェンダーとしての大学生活についてメールでやり取りをさせていただいていました。同じ当事者だからということもありますが、先輩とは話もしやすかったですし、安心感があったことは覚えています。同じ悩みを経験していると共感してもらいやすくなるし、新たな発見も自分事として置き換えて話せるからすごくいいなと思います。大学生活(今思えば社会人生活も含めて)で一番当事者に出会えた場所は CASSIS だろうなと思います。なかなかLGBTサークルだと自明であるコミュニティなんてないし、自明であるとわかった場所ではないと「自分がセクシュアルマイノリティだ」と打ち明けることのハードルが上がります。CASSIS に加入して非常に良かったと思っています。当事者だから同じ痛みや悩みを話せるだけではなく、ノンケ(セクシュアルマイノリティではない人)へのいらいらや不満を話せるのが大きかったです。ノンケにとっては当たり前の行動でも、無意識的にセクシュアルマイノリティにとって傷つくことはあります。それらをいちいち相手にしていたら大変ですが、同じ悩みを抱えた人同士なら、共感が絶えないし鬱憤も晴らすことができます。また、セクシュアルマイノリティの中には自分の居場所をつくるのが難しくて一人で悩んでいる方はたくさんいます。彼らの居場所の一つとして CASSIS が存在してくれるなら非常に嬉しいです。CASSIS の活動の中に毎週お昼休みにランチ会を開催していました。このランチ会でメンバーが集まって交流していました。最近ではオンラインになることが多く、メンバーが集まりづらくなっていると聞いています。なんとか対面ランチ会を復活させてもっと交流を増やしてもらいたいと願います。

8. レインボーウィークとのかかわり

関学ではレインボーウィークが毎年開催されています。これは性別だけではなく様々な価値観と多様性を認めてインクルーシブな大学を目指す

ために開催されています。レインボーウィークには大学入学当初からかわらせていただいて、運営や交流会、当事者としてのパネルディスカッションなどの活動に参加してまいりました。レインボーウィークで印象に残っていることは、イベントとして行うことで普段セクシュアルマイノリティを見聞きしたことないという学生たちから「あのイベント何？」と興味を持ってもらうためのきっかけづくりになっていると感じたことです。まずセクシュアルマイノリティが特別な存在ではなく身近に存在しているんだと感じて知ってもらうことが大切だと思います。その契機としてレインボーウィークが存在していることが大切だと思います。同級生たちがレインボーウィークのフラグをみて、その存在を認知してくれていると感じたときはすごく嬉しかったと記憶しています。

レインボーウィークの中で自分らしさを表現できたのはパネルディスカッションです。これは当事者の学生たちが自分たちの話を学生や先生、大学関係者の前で語り合うイベントです。自分の大学入学までの話や入学後のセクシュアルマイノリティとしての苦悩などを多くの人に知ってもらうことができました。ディスカッションを終えた後に「生の声を聴けてすごくためになった」とコメントいただけたときは、すごく達成感を覚えました。自分の言葉でリアルにセクシュアルマイノリティではない方々に伝えることが大切だと思います。関学でのパネルディスカッションで自信と達成感を得られたので、学外でも講師活動をいくつか行うことができるようになりました。一番聞いてもらいたい相手は小中高生とその教員たち向けです。自身の生活を振り返ってみると、中学高校時代の「自分が何者かわからない」時期が一番つらかったと思います。そのような時期に、講師としてセクシュアルマイノリティの方が説明してくれたら非常に助かると思います。だから自分の声で救える学生たちがいるのなら、講演会を通じて助けたいと思っています。

9. 就職活動

私は就職するなら IT 系などの比較的新しい業界が良いなと思っていました。勝手なイメージですが、金融系や保険会社などは制服があったり、

男性はこの格好、女性はこの格好というようなジェンダーがしっかりあるイメージです。対してIT系であれば特に決まった服装もないし、働いている人も男性が多いとは思いますが女性に対してこうあるべきだという固定概念が少ないイメージです(完全に偏見ですが笑)。

就職活動を始めてみたのは、ネット検索をきっかけに大学3年生の頃でした。インターンがはじまっていく夏休み前に、周囲の同級生たちにつられて始めてみました。最初は「LGBTフレンドリー企業」などでネット検索をしてみてどんな会社がLGBTフレンドリーを謳っているのか知ることからはじめました。そこで見つけた特集記事に、今就職している通信会社が記載されていました。IT系に興味をもっていただけと、有名企業でもあったのでとりあえずインターンへ行ってみようという気持ちでインターンの選考会を受けてみました。私は自身のセクシュアリティをあまりマイナスには思っていないので(といってもプラスにも思っていないのですが)、選考会の面接時に学生時代に頑張っていたこととしてCASSISの幹事を行っていたことやレインボーウィークに協力していたことなどを話しました。面接官は興味津々で話を聞いてくださり、私の頑張りをまっすぐに認めてくれました。面接の最後に「何か聞きたいことはありますか?」と質問されたので「私のようなトランスジェンダーが就職した場合トイレや宿泊研修などどうなりますか?」と伺ったところ、「雇用形態に男性、女性としてなにか区別されることはないしトイレも女性用を使っただけで問題ないです。宿泊の場合は女性と同室が嫌でしたら、個別のお部屋を用意いたします。現にうちにはトランスジェンダーの社員がいますよ」と答えて頂きました。この言葉はかなり就職会社の決め手になったと思います。

就職活動で一番感じたことは、セクシュアリティの問題も発生するかもしれないけれども本人の個性や頑張ったこと、スキルアップしたことなどが重要で、性別や性的指向について会社が関与するべきではないということです。経済活動を行うのに、トランスジェンダーだからというのはあまり関係しないと思います。トランスジェンダーであっても仕事ができる人なんてたくさんいるし、ノンケの方でも仕事ができない人もいます。会社は収益をあげてくれたり、会社の利益になる人材を求めているのでセクシュア

リティは重要でないと感じました。ただ、人事部には事前に相談しておいた方がいいなと思いました。私は月一で女性ホルモン注射を接種しているのですが、転勤がある会社なのでどこでも打ってくれる病院があるとはいえません。人事には身体の事情はお話して転勤が決まる前には場所を伝えてもらえるように言っています。また、今後性別適合手術をうけるときにある程度まとまった休暇をとる必要があるので、人事には自身がトランスジェンダーであることをカミングアウトしています。人事から他の社員、部課長に漏れていると感じたことはないです。

10. 現役生へのメッセージ

私から現役生に伝えられることはセクシュアリティで悩んでいる人にはCASSIS や人権教育研究室の方、カウンセラーなど誰でもいいので相談しやすい人を作ってほしいということです。セクシュアリティは誰にでも打ち明けられるような話ではないので自分が信頼できるような人、同じ悩みを抱えている人を見つけて共有することが大切だと思います。社会人になって思うことは、大学生の方が断然自分に合う人を見つけやすいし、セクシュアルマイノリティの人と仲良くなれる機会が多いと思います。会社に入ってしまうと LGBT サークルがあることは少ないし、職場でセクシュアリティの話をするのは難しくなってきます。プライベート・職場関係になくセクシュアリティで悩むことは多々あると思いますが、私はそのとき大学生時代に仲良くなったセクマイの友人に話を聞いてもらうことが多いです。年齢があがりライフステージが進んでいくと、ノンケとの違いに結婚や出産の問題が発生してくることが多いです。そんな中、セクマイ同士で相談できることは非常に心強いです。現役生にはそんな仲間を一人でも多く増やしてほしいと思います。

そのほかに伝えることがあるとすれば、何か自分の強みを見つけてほしいということです。多様性が認められてLGBTなどのセクマイに寛容になってきた社会であっても、未だ偏見や差別がなくなったとは言えません。そんなマイナスなイメージもついてしまうことがあるセクマイが、社会で自分にしかない強みを見つけていくことは重要であると考えます。どんなこと

でもいいので自分の「武器」となるものを見つけて、時間に余裕のある大学生時代に極めて行ってほしいなと願います。そんな「武器」や戦う必要がない社会に一日でも早くなればいいなと思います。